

三省錄

二

9
3780
2



三省録

飲食之部

志賀忍



○食人の天なりといふは食なるも一日もたれづといふものこ
極小なる食もいふは食なるも一日もたれづといふものこ

先代飲食ではいふは食なるも一日もたれづといふものこ

いふは食なるも一日もたれづといふものこ

いふは食なるも一日もたれづといふものこ

いふは食なるも一日もたれづといふものこ

いふは食なるも一日もたれづといふものこ

いふは食なるも一日もたれづといふものこ

いふは食なるも一日もたれづといふものこ



海に一陶遠物とて持てくるる臣たすけ小むらひ何ぞ爲者
ともあらずをきかたつて相許しけき酒肉すき者の
是小持参やとやと豆高小小録を京文とて小き巻とるる
をかきとるものな一種とて杯を取りて随分酔ひし
学問風雅の味は酒肴の味とある理小とてやとれや
りりり紀後酒とあるは政制以後他地の酒一切入
ぬや禁なり徳大とても自國の酒で一回小用とあるは
又小持参のよりなりとあるは食の質素なるとあるは
とれや早き當處漁漁ありと朝夕とて酒海でこの美を
はねとてとるはふね松小小録付にたつて自記とある
つる風俗とてある 肥後物語

○東瀛日とのうと右大納相遠那常川山商の松竹本盛細り
順承後より魁の楚刺を到來地引盛盛一切とあるとて
そのうちを和卓小居とて小くもつ勢利朝の旅飯とて
て日只今到來ふとてとあるは味とあるはとてとあるは
進上とてとあるは言上とて和卓とあるは和卓の言とて
白華とあるは

付得るものなりとすんやとつとあるはとてとあるは
者小持参とてとあるはとてとあるは 市井雜談

○むう一紫式部あるとて又宣孝他地のとてとあるは
つる宣孝のつとあるはとてとあるはとてとあるは
とてとあるは

日のちやふもやうを清いそふまゝいふぬ人ありとて
と詠侍りしとぞ 同上

○北条五位景武の上へ加へしといふも累代遠逝しとてその品
逸るは義をいふ窮武を授けし政道ふとて天中景武に
なりんづ武藝を泰時時房の式目五十條をさうめゆ年
みづろ儉をさす是に一食子さうり初を焼をやめずと
粟米をひくも式に施しつとて其の載のき人こそ孫時頼の
賢ゆとてこれ九代々傳へり 北條九代記

○北条相模入道言時彌奢をさうとてその宴會とては源九代あり
い青九種を用ゆとて 楠公成程は挙動をさうとて人小語て曰
北条はさうとて源のうけ 市井雜談

理齋曰言時と天中をさうとて志なり源九種とては九種とて
楠公の歎ありと今世小ありとて下とのうの九種九種
竹葉末とて言時ありとて楠公小をさうとて言時死
せんふや必やと

○禅關山和尚に道源あるなり天龍より蒙憲和師ぬきなり
立寄る山関の位坊ひき入る言時時を編しけきやと
貧乏のうけなきとて言時密意も言小まのき破きとて現
ばとてつれとて言時をさうとて小僧をさうとて焼餅で
さうとて言時とて言時とて言時とて言時とて抄物とて
言時とて言時とて 除睡抄

○飲食と肌渴をさうとて言時とて言時とて言時とて言時とて
中三

○
東屋に風雨で流ぐわくまゝ華義は流をこのひるうづ
但し東屋に秋張とのぬつたあより省略なることゝ忽ち
破損し難く及ぶなりものうへ号上賓客にむきまゝ
やぬきながれつるものほりりあはれぬおたしやうた
そのなり飲食のひしりらふ極楽落しく飢かやゝあま
しゝするなふなりと 牛の涎

○享保の世やう六月三日にわつ 伝わうきし 市条目のうちと
食料は勿論外志を潤澤ともみぶふはのひまてふや
根と酒とを新むきと多く地おふ根すねぬなりと 同上
○むうのなを委也いふ東屋の敷をかきまゝ 何れはうな二種
もおきまゝとせけやめをわらうものゝやうに相あはる

人を也 飯やを食次り へき播挽でとて 登の宿許より
持来りて致し 物にひきまゝいふことゝあはれり 會合
とあはれけし海とや 今とたの振動もけし けしやうと
りもきりしとた振小きのり質朴と致し 質朴と致し 質
つれあや小ねつとた 随かゝる様をいやむ人ゝふしと
やうけもつとあはれり けしとた 地合をすうと致し
なることゝあはれ

東照宮御代参向 日東の山家風のわのとつてゐるやう
小いふく ね世に 余のやうのり ねとるの ねとるの ね
なるやうに遠くをなほ子ねる ね世に ね中より 上ねなる
憲政 今川氏志なやうの なるやうの なるやうの なるやうの

加茂清正系中 同上

○加茂清正系中は中流七ヶ条のよりある人々をさるる記

一 大身小身あらずば侍どもては是等條を

一 赤松の乃不の油の相刃刻より多法をつひ食と喰ひ

弓矢射鉄炮と斬りては武すも及ばずより一に中々

おしき加増てき事

一 ちがひさし子てあらずては夢野麻指お撲ヶ根の美くても

松山史

一 衣類のより本條袖の類よりさるる衣類も金銀と夢や

手あ不成方そのより曲事且それよりお意ふ武を

を考へ人成持すべき事用の附はる事にて事

一 考へ侍事つき合客も人亭主の外かりるあけ合思界

飯より一武藝修りの時ハ人教多くてお事

一 軍禮の法侍乃て存知り不はるは華麗とのむかの可

為曲事

一 乱舞一考侍ゆてちとちとを止ハ人成切んとおもふ然る上

兼より人のまゝよりよりゆるりのみくは武道の外乱舞

稽古の事て加切後事

一 學問ハ入精兵書や後考孝の公急るる事要請辨句

考をよむより侍山なり心と華素風流手弱きこと存

はるきよりあはれ女のやうにあつりのより武士の家おはる

くハち刀鎧を押しく生死す急き事を知べき事

煙を上味とてしつゝや行ぬ

○昏れ小陰の吸物も享保中

明君の言を聴きしに、寔に略ハ數百千と集めしを印
の貝お小合さるりの由名昏儀と祝するは是程めづる物
かかゝ夫座の以言ふを思はなう味あるなりけり
世季とて浮山なるおと儉と稱する才一なりき余風系
師子ハ侍りたまふも大坂の嘗て用ひしあるや、きこ
やありし時、その浮山あるを鄙るゝのておとや、
小すゝ子上巳ハ小陰戌用ゝ祝儀とて、既ハ風を
や、誰も鄙るゝを思ふ、
其飲も味をえらす、
恒持も易く是を祝儀を以て

御りハ玉管を著しつゝ、
号令あり、
草茅危言

○その身朝夕飲食の存否をうろくし、身とを労働す、
づゝゝ酒食は、
ずゝゝば、
と申あひ次子付をや、
身と労働す、
すゝゝと、
ゝおの、
○あるふ、
地獄遠りあ、
中十六

づゝゝ酒食は、
ずゝゝば、
と申あひ次子付をや、
身と労働す、
すゝゝと、
ゝおの、
○あるふ、
地獄遠りあ、
中十六

地獄遠りあ、
中十六

神カムヤマト 昂サカサチ
戒イサナ 也ナリ

よめくね連にんてそ侍小神の社も、邪の神な案
 一代のちり本言い版とけやと奢てありそけ儉約で達へ
 ず家業より、法や冬一杯飲る森いともろす然るも
 極楽の说法外にあつた、猶門磔火罪返放閉門遠隔とを
 言ひに慈悲の说法なり

○すゝ原あきやう和尙わしやうの地ちなりとて

飯^イと何^{ナニ}の爲^{ため}小喰^{こく}うそのどや脾^ヒ重^{ぢゆう}を^をゆるたを小喰^{こく}く
そのりむい^いうう^うち喰^くう^うい^いう^うそのり^り志^しう^う小保^{こほ}物^{もの}
ち^ちと飯^イの喰^くう^うまぬとい^いふ^ふな^な人^{ひと}れ^れ解^{わか}て^てむ^むう^うさ^さと
山^{やま}たを^をの計^{はかり}喰^くなり^{なり}飯^イこ^こう^うあ^あう^うず^ずそ^そう^うの^のち^ちう^うこ^こ

喰くを喰くぬらんやいすいうゑ飢うゑの東きつづきうゑ飢うゑ東きつずい

[illegible]

大神君の夢狩所川にうづ蛤へ王子とて草や蕨でめされ
 赤き草の上と云ふ身をうつりて人のさへ恥を知しとの数語
 掃部卿才一首信一なるとり 武野燭談

○神君の偉小百姓の苦と一粒百石として去年の秋に種で丸

〇うぐの若きなり一々一の秋を種くぬ一はれで
 刈てお終ては穀をむくく一粟くぬ一主將たてり
 法人で救ふ百姓のくく一血の涙をわたりはやくと聖地を
 のはき祭に民のくく一みするは血のなきくく一若きを
 あくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
 とすくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
 民百姓の罪苦であくくくくくくくくくくくくくくくくくく
 民であくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
 のくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
 〇尾張光友は儉約の法で建らるくくくく一け二葉のくくくす
 一をさくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
 一をさくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

脾胃をくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
 人くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
 一け七葉あくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
 味くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
 二葉といくくくく男の常をくくくくくくくくくくくくくくく
 養せくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
 一つでくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
 法有るくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
 女房に夫くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
 貴くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
 一は振舞なすくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

司上

下
（
）
以
用
で
勤
る

常憲公

續兵家茶話

永井家のものぐさ

同上

ふきのたきとや

夢ひのひにその家の床より一物あり自在のたゞ子彌我
うけんとてある何れも其のやうに盡なりとて候う
ら津手一と

此の屋日ふに夜焼けが天下平なり焼やう時ハ氏
一む焼やうとていふなりかゝるに子焼バ家亡す言
屋の以制も此の屋よりやうき焼やうな一の屋不
あ

よきふにやあきふにやあて世の人のふ自在焼や
二夢一のふに飲食ハ人命のうきとていふなり焼
と鴉奪ふにやあて書一とてやうとていふなり威
二つふにやあて世上風説集

○人のうき書子年事やうとて家の貧はとあうと家の富
わあうとて年事やうとて茅屋子住するはとて何とて
住する子も勝るなりとて子も勝るなりとて子も勝るなりとて
子も勝るなりとて子も勝るなりとて子も勝るなりとて

○資業ハ一切のたうとて必家を辞するはとて一切の味ハ
大款のたうとて必家を辞するはとて一切の味ハ
大款のたうとて必家を辞するはとて一切の味ハ

○大内義隆云世界の味ハ必家を辞するはとて一切の味ハ
大款のたうとて必家を辞するはとて一切の味ハ
大款のたうとて必家を辞するはとて一切の味ハ

○瑞子女王曰道徳仁義ハ人の食なりとて必家を辞するはとて
大款のたうとて必家を辞するはとて一切の味ハ
大款のたうとて必家を辞するはとて一切の味ハ

